朝鮮史上の逸話



朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2026

朝鮮史上の逸話

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2026

はじめに

朝鮮人民は、久しい昔から誇らしい歴史と燦然たる文化を生んだ。

5000年有余の歴史のひとこまひとこまには、年代と世紀を継いで、各人の誠実・勤勉な創造的労働をもって早くから東方文化を花咲かせてきた先祖たちの知恵と能力がこもっている。

本書には、朝鮮人民の間に広く知られている逸話のうちの一部が収められている。

目　次

曇徴の名画

曇徴は高句麗(B.C.277年からA.D.668年まで存続した朝鮮初の封建国家)の名画家であり、日本に招かれていっては墨の作り方や製紙術を教えた有能な技術者でもあった。

彼が世界的な傑作とされた法隆寺金堂の壁画を描いたことは世に広く知られているが、それを描くことになった時の出来事についてはあまり知られていないようである。

招かれて日本に渡った曇徴は、日本人に高句麗の画法や絵の具の製法と使用法を教えていた。

当時奈良に法隆寺が建立され、彼は金堂の壁画を描いてほしいと要請された。

快く応じた曇徴は直ちに法隆寺におもむき、準備を始めた。

ところが一カ月が経ち、二カ月が過ぎても、彼は一向に筆を取ろうとしなかった。

それは、彼が絵の準備を始めた頃、祖国高句麗に数百万の外敵が押し寄せたという報に接して、胸がつぶれる思いをし、一向に落ち着けなかったからであった。

一体わが国が敵の大軍を撃退しうるだろうか。もし侵略軍を防げなかったら、全国が戦火に見舞われ、人民は悲惨な生活を余儀なくされる。

彼はいらいらし、絵の具を思い通りに調合することもできず、筆を手にしても、指に力がつかなかった。

このように一人悶々として日を送る曇徴の胸中を知るよしのない寺僧たちは、次第に彼に疑いの目を向け始めた。

「あれは本当に高句麗の名画家なのか」

「絵かきだなどと偽って詐欺をはたらくペテン師じゃないのか」

「何カ月が経っても絵を描こうともしないんだから、にせの絵かきに違いない」

こんな非難は彼の耳にまで入ったが、それでも筆を取ることをためらった。寺僧たちの非難に勝てずむりやり絵を描いたとしても、絵がまともなものにはなれないだろうし、よしんば絵がそれなりに出来上がったとしても、それが亡国の人間が描いたものだと世に知られたら、別して見向きもされないだろう。

そんな思いで居ても立ってもいられない日々を送っていたある日、住持が訪ねてきた。

「あんた、お喜びなされ。高句麗に侵入した数百万の隋の大軍が乙支文徳将軍の剣にことごとく斬り倒されてしまったということですわい」

気力が衰えて床に臥していた曇徴は、がばと起き直った。

「なんですと？　本当ですか、それは」

情報は確実なものだと聞かされた彼は大喜びし、翌日、山中の清流で体を清め、直ちに絵の具を調合し、筆を手にして金堂に向かった。

高句麗が数百万の侵略軍を殲滅したという喜びで胸がはずみ、全身に力がみなぎった彼のふるう筆は、鶴が舞いを舞っているかのように壁面を縦横に駆け巡った。

こうして法隆寺金堂の壁には神秘なばかりの絵がまたたく間に描き上げられた。

壁画完成の報が伝わるや、寺僧はもとより大勢の人たちが連日押し寄せ、その恍惚たる壁画を眺めては、ただ舌を巻くばかりであった。

「この壁画は世に二つとない名画だ。曇徴の絵はただただ神秘というほかない」
こうした評に対して曇徴は次のように語ったという。
「金堂の壁画が立派に出来上がったのは、私の画法が神秘なことにあるのではなく、ほかならぬ高句麗魂がそこにこもっているからだと言えましょう。いかな大敵にも屈することを知らぬ、英知に富む勇敢な高句麗人の魂があるからこそ、この壁画が完成したことを知るべきでしょう」
法隆寺金堂の壁画は、日本の宝であり、誇りであるとされていたが、金堂が炎上して、その存在を終えてしまった。

一役人の力で

倉助利が高句麗の宰相を務めていたある年の秋、王が臣下を集めて言った。
「強力なえびすがわが国の辺境をひんぴんと侵している。この辺境の不安な事態をどう処理すべきか、意見があれば述べるがよい」
当時、高句麗西北方の国境に隣接するえびすが、しばしば国境を越えて住民を殺傷し、略奪に狂奔していた。
3年前の293年、えびすの侵入を撃退すべく烽上王が軍を率いて辺境に向かったが、新城の付近で優勢の敵兵に遭遇して苦戦し、鵠林まで退却した。この時、新城の城主高奴子が500余の騎兵を引き連れ、敵兵に反撃を加えてこれを撃退し、王はことなきを得ていた。
けれども数日前えびすがまたまた侵入し、西川王の陵を荒らしたのである。

ところが、陵を掘っていた兵たちがわけもなくばたばたと怪死し、掘った穴の中からは不可思議な楽の音が流れ出した。これを鬼神の祟りだと思い、仰天したえびす兵は、あわてふためいて逃げ去ってしまい、大事には至らなかったのである。
ともあれ、辺境の地にえびすの侵入が繰り返されているのだから、これを放置するわけにはいかなかった。
「えびすの侵入を防ぐ方策についてよい方法があるならば、忌憚なく述べるがよい」
ある臣下が、辺境の守備軍を増強してはという意見を出したが、これに対して、大々的な徴兵を行って辺境へ送ると、国都をはじめ諸地域の防備が手薄になり、かえって国防力の弱体化を招きかねなくなるから、そうするのはよくない、それに凶年が続いて人々が飢えにあえぎ、国の財政も枯渇状態にある状況で、徴兵を大々的に行って辺境に常駐させること自体が適切な処置ではないという反論が出た。
「ならば辺境を守る方策はないということなのか」
王は嘆かわしげに一同を見回した。
この時、宰相倉助利が一歩進み出た。
「私に一つの案があります」
「どういうことじゃ」
「大々的な徴兵をもって国境の守備軍を増強することが困難な現状において、ただ一つの解決策は、辺境の守備を任せるに足る役人を一人選んでその任に当たらせるべきだということであります」
「役人を一人？」
一同は首をかしげて宰相に視線を集中した。王も訳が分からず、口を開いた。
「国難を防ぐ大事を、いかに一人の役人に任せようと言うのか」

「屋根を葺くには垂木よりも先に梁をきちんと渡さなければなりません。兵員をいかに増やしても、彼らを受け入れて指揮するに足る将帥がいなければ、それらの兵はものの役に立ちません。ですから、辺境を守るに足る知略と胆力にすぐれた人物を選んで守備を一任することこそ、何よりも重要だと存じます」
「なるほど、もっともな話じゃ」
王が肯定し、臣下一同もそれに一理があるとしてうなずいた。
「では、推挙する適任者のめぼしもついていると言うのか」
宰相はすかさず答えた。
「新城の城主高奴子が適任者ではないかと存じます」
「高奴子だと、先年のえびすの侵入時、鵠林にて朕を助けたあの高奴子のことなのか」
「さようでござります。その者に辺境の防備を任せ、しかるべく後援もすれば、自らの知謀と胆力を存分に発揮して最善を尽くすでしょうから、辺境の守りを憂慮するには及ばないと存じます」
王は諸臣下の賛同の下、高奴子を新城の太守と任じてえびすの侵入を防ぐようにと命じた。
高奴子は元来威風堂々とし、住民の中で声望が高かったこともあって太守の任についてからは、知恵を尽くして政事に専念し、国境の防備にも大きな力を入れた。それで辺境の住民は高奴子太守を積極的に助け、周辺のえびすもこれに恐れをなして、あえて侵入することがなかった。
一人の適任者を掘り出して太守の任につけ、国難の解決に大いに尽くした宰相倉助利こそ政事に抜きん出た有数の実力家であると、臣下たちはもとより、住民の中でも感嘆の声が高く上がり、その名は全国的に一層広く知られるようになった。

弱兵と見せかけて不意打ちをする

扶芬奴は高句麗の名将である。ある年の夏、王は扶芬奴ら高句麗の諸将軍を集めて憂わしげに言った。
「今、敵軍は険しい地勢を頼みにして、われわれに追随することを拒み、隙を見ては出撃して略奪をこととし、危険だと見ると城に籠ってわれわれに盾突いているが、放置するわけにはいかない。これをいかに処置すればよかろうか」
一同は顔を見合わせるばかりで、しばらく押し黙っていた。
そうした時、扶芬奴が一歩進み出た。
「それがしの考えでは、わが軍は決して強兵ではないと思い込ませる策略を使えばよかろうかと存じます」
ところが扶尉猒がこれに反対した。彼は、高句麗の建国者東明王時代に北沃沮を帰属させた老将軍であった。
「それは恥ずべき策略だと存じます。これまで周辺の諸国がわれわれに帰順したのは、わが高句麗の強大な力に威圧されたからではございませんか。それを今になって国の威厳を貶めるような術策を弄するのはいかがなものかと存じます」
しかし、扶芬奴は負けずに言い張った。
「今、敵国は険しい地勢を頼み、頑強に抵抗しているのですから、力によってのみ敵軍を屈服させようとして無理押しするならば、かえって国の威厳を傷つけないとも限りません」
王はしばらく考えてから扶芬奴に目を向けた。
「その方は何か深いはかりごとに思いを致しているようだが、では、わが軍が強軍でないと思い込ませる策略をもって敵軍を瓦解さ

せるというのはどのようなものなのか」
　扶芬奴はさらに一歩踏み出て答えた。
「まず辺境の軍と装備を貧弱なものに見せかけ、そのあとわが方の兵士を変装させて敵中にもぐりこませ、われわれが強がっているが実は見るほどのものではないというデマを撒き散らすのです。そうすれば敵軍はわれわれを見くびり、緊張をほぐし、次第に防備も緩めることになるでしょう。
　こうした油断に乗じて、わが方の精兵1個部隊を敵城の近くへひそかに送り込んで待機させ、他方、いくばくかの軍勢を出動させて戦いをいどめば、敵軍は応戦するでしょうし、数度の攻防戦後、わが軍が力尽きたと見せかけて退却します。
　そうなれば敵軍は勇み立って城門を開き、追撃を始めるでしょうから、城門が開かれた隙に伏兵が城内に突入すればたやすく城を乗っ取れるでしょうし、そのあとすぐさま出撃中の敵軍を前後から挟み撃ちにすると敵軍は袋の中のネズミということになるでしょう」
　王は大きくうなずき、作戦の一切を扶芬奴に任せることにした。
　彼は早速策略を推し進めた。
　まず、敵国近くの軍と装備の大半を後方深くへ移して辺境の防備が手薄になったように見せかけ、才気ある部下の一人を塩売りに変装させて敵中に送り込んだ。
　やがて敵軍は塩売りのもっともらしいデマにまどわされ、実際高句麗側の国境防備の手薄なことを確かめもして喜び、時至れば高句麗に攻め入らんものと虎視眈々とした。
　そろそろ機会は到来したと見た扶芬奴はある日、夜陰に乗じて敵城のすぐ近くに自ら伏兵を率いて忍び込み、他方、夜明けとともに王の指揮する軍勢が敵城に攻撃をかけた。

　しばらく攻防戦が続いた末、高句麗軍は利あらずとして退却した。
　すると、案の定敵軍は城門を開いて追撃を始めた。
　その隙を見計らった扶芬奴は、伏兵とともに開かれている城門から城内に突入してたちまちのうちに城を占領した。
　城が落とされたとの報に追っ手の軍勢があわてて引き返したが、王が指揮する高句麗軍も向きを変え、前後から攻撃を加えた。
　遂に敵軍は動きが取れなくなって降伏し、結局敵国は高句麗に帰属した。
　数日後、戦勝を祝って宮中で盛大な宴が催された。
　扶芬奴は扶尉猒のそばに移って静かに声をかけた。
「どうだ、敵国に高句麗軍は強兵にあらずと見せかける策略が今も気にくわないのかね」
　扶尉猒はかぶりを張った。
「もちろん気にくわん」
「今もまだ？」
「さよう。わしは絶対にわが軍が弱いなどと見せかけるようなことはせん」
「なんだと？」
「そんなことをして、敵国に見破られて、戦いに破れないと誰が断言できるのだ」
　二人の問答を黙って聞いていた周りの将軍たちがはははと笑った。
「扶尉猒将軍の言い分も聞き捨てにすべきではない。教訓なるものは戦いに勝った時よりも、破れた時のものが骨身にしみるものだからな」

百結の『臼搗きの歌』

百結は有名な音楽家であった。

極貧の彼は常に飢えに苦しみ、着る物といったら百もの切れ地をつぎはぎしたつづれだとして、人々から百結と呼ばれていた。

けれども彼は貧苦などは一向気にせず、ひたすら琴に熱中して楽曲を作り、弾奏することを大きな楽しみにしていた。彼は琴をもって人々の喜怒哀楽を自在に表現した。実際人々はそのメロディーに引き込まれて、喜々ともすれば悲しみに包まれもし、或いは怒りを覚え、不満をぶちまけもした。

ある年の暮れ、正月を目前にして近隣の家々では米を搗く臼の音が楽しげに響いていた。部屋に座ってわびしげにその音を聞いていた妻が夫の百結に不平をこぼした。

「人様たちは新年を迎えて米を搗いているというのに、うちには米の1粒もなくぼんやり過ごして……。食べ物もなしにどうやって正月を迎えることができるのかしら」

百結はほほと笑って言った。

「なあお前、人様たちの米を搗く音がそんなに羨ましかったら、一つ米を搗く曲を弾いてお前を楽しませてやろう」

百結は琴を前にして、「えいやらトントン、トントン」と米を搗く掛け声、槌の音を響かせながら楽しげに琴を弾いた。

琴の音は部屋の中から外にも流れて、近所の人たちはその音に合わせて米を搗き、曲にもなじんだ。

こうして百結のこのメロディーは『臼搗きの歌』として世に広まっていった。

薛聡の「花王戒」

ある年の夏、そよ風が吹く宮中の庭園で扇を使いながらのどかに時間をつぶしていた王が、退屈して薛聡を呼んだ。

「今日はじめじめした雨も止み、涼しい風が吹いてはいるが、酒も旨くなく、音楽も面白くない。だから、その方が近頃何か変わったことを聞いていることがあるなら、一つそれを聞かせて朕のうつうつとした気持ちを慰めてくれまいか」

しばらく何事かを考えていた薛聡は答えた。

「はい、近頃耳にした話が一つございます」

「うむ、どんな話じゃ」

「花の王の話でございます」

「花の王じゃと？　花にも王があると言うのか。それは初耳だが面白そうだな。一つ聞かせてもらおうか」

王は目を閉じ、耳をそばだてた。薛聡は居ずまいを正して話し始めた。

「ある花の国に春が訪れて百花が咲き乱れましたが、中でも花の王はとりわけ美しくほれぼれするほど大輪の花を開いていました。

そんな中で遠近の別なく、さまざまの花が競うように花の王のもとへ参上し、歓心を買おうとしました。

なかでもなまめかしいバラが王の前にしとやかに現れて、『私は白雪のような海に顔を映して眺め、春雨に打たれて体を洗い、清風に吹かれることを楽しむ香しいバラでございます。私は王様の高徳を慕い、薫香ただよう陛下のそば近くに仕えたく願ってやみません。なにとぞ私のこの願いをお聞き届けくださいませ』と言いました。

ちょうどそこへ杖を突き、腰を曲げ、危うげな足取りでオキナグサが現れました。
『私はあの高い山の麓に咲くオキナグサでございます。昔からいかに珍味嘉肴にておなかを満たしても薬を使わないでは気力がつかず、立派な衣料があっても草の皮で織った粗い麻の服を捨てはしないと言われています。したがいまして、私の顔形は取るに足りませぬが、何かのお役に立ちはしまいかと存じましてお伺い致しました』
こうしてバラとオキナグサは共にひざまずいて花の王の言葉を待ちました。
この時、かたわらに立っていた臣下が花の王に尋ねました。
『バラとオキナグサがお答えを待っております。どちらをご採用になられるご所存でございましょうか』
花の王はあでやかなバラと腰の曲がったオキナグサをかわるがわる見比べて、『オキナグサの言い分に間違いはなかろうが、このようにきれいなバラもざらにはない。どうしたものだろうか』と口ごもり、決断を下しかねていました。すると、オキナグサがちょっと前へ進み出て言いました。
『およそ王たる方の中には、よこしまな者を近づけず、直情径行の臣下を遠ざけない方は稀にしかいないと言われております。私は今日、私どもの王様はご聡明で道義心も厚いと聞いてお訪ねしましたが、どうも私の思い違いだったようですから、これにて失礼致します』
オキナグサはこう嘆かわしそうに言って一礼し、帰ろうとしました。
すると、はっと我に返った花の王は立ち上がり、オキナグサを抱きしめて『悪かった。朕が悪かった』と謝り、オキナグサを採用す

ることにしました」
薛聡の話を最後まで聞いた王は、眠っているかのように目を閉じて黙然としていた。やがて目を開け、薛聡を見つめる王の顔色は赤く上気した。深い自責の念に駆られているようであった。
「その方の話には実に深い意味がこもっている。だからこの話をよく整理して書きとどめておき、王たる者たちの戒めとなるようにするがよい」
王は自身の心情をこのように吐露した。
薛聡はこの話をもって日ごろ王に忠告したいと思っていた目的を果たしたのである。
後日、『花王戒』という題名で本が出版され、優れた寓話作品として世に残された。

率居の老松

率居は幼少の頃から絵を非常に好み、貧しくて三度の食事に欠けることはあっても絵を描かない日はなかったという。
当時、彼の画術と肩を並べるほどの画家はどこにもいなかった。
彼は、560年頃に建立された皇龍寺の壁に絵を描いてもらいたいという依頼を受けた。
こうして描いた絵は1本の老松であった。
数百年の風雪にさらされながらもたくましく生き続けた老松は、亀の甲さながらにごつごつした幹や、すぐさっき露に濡れたようにキラキラと輝く青々とした葉などで、神秘と言えるほど生き生きとしていた。
誰が見ても本物の老松と見まがうほどで、カラスやトンビ、スズ

メが飛んできては壁にぶつかって落ちるようなこともしばしばあったという。
国の宝と見なされたこの壁画老松も、歳月の流れの中で雨や雪、風にさらされて、色が褪せ始めた。
これを惜しんだ寺僧たちは苦労の末、元の絵の具と同じような絵の具を作り出してなんとか元通りに描き直した。
けれども、それからは鳥が飛び込んでくるようなことはなかったという。

于勒の論拠

于勒は伽倻琴を考案し、数多くの作曲を行った。
王は彼に、多くの楽人をつけて伽倻琴を習うようはからった。
于勒は彼らに伽倻琴の奏法を教え、すぐれた曲に習熟させたうえで、王の前で演奏を行った。
多くの臣下とともに演奏を観覧した王は、伽倻琴の独特なメロディーに感嘆し、大いに満足した。
ある日の演奏会の最中、臣下の一人が王に告げた。
「あの伽倻琴から流れ出る音曲は、伽倻国を衰退させるもとになった面妖なものでございますから奨励すべきではなかろうかと存じます」
このざん言は于勒の耳にも入り、彼は憤然として王に言った。
「昔の人たちが音楽を作ったのは、人々が言葉や行動のみでは到底表現できない喜びや悲しみを他人に伝え、吐露することにありました。それがどうして国の衰退の原因になりましょうか。
音楽が国の衰退や滅亡の原因になるならば栄えている国には音楽

がなく、衰えている国にのみ音楽があるということになります。
私の考えでは、音楽そのものに国の興亡がかかっているのではなく、音楽をいかに用いるかにかかっていると思います。
栄える国では音楽が正しく使われ、衰える国では音楽が正しく使われていないだけのことだと思います」
この言葉にくだんの臣下は一言もなく、ただ顔を赤らめるばかりだったが、王は大きくうなずいた。
「その方の言い分が正しい。伽倻国が滅びたのは、伽倻王が淫奔で生活が乱れ、政事をないがしろにしたせいである。そもそも音楽にいかなる罪とかがあると言えようか。国の太平と混乱がどうして音楽にかかわっていると言えるのか」
王はその後、于勒をいっそう優遇し、伽倻琴を全国に広めるようはからった。

大同江の詩人

鄭知常（？～1135）は高麗（918～1392）時代の平壌の生まれで、幼児から詩を詠んで人々を驚かせた。
彼は3歳（数え年）の時、洗濯に出掛ける母親の背に負ぶさり、大同江上を飛び交うカモメの群れを見て、次のような詩を吟じた。

すいすい飛び交う白いカモメ
頭を空に向けて歌うたう
真白い毛を水の上に浮かべ
赤い足できれいな水を踏んでいる

鄭知常が並はずれた詩才に恵まれて成長し、世に広く知られるようになると、当時、国の文豪を自負していた金富軾は心ひそかに彼をねたんだ。
金富軾が鄭知常への嫉妬をいっそうつのらせたのは、二人がともにある山中の寺に遊んだ時の出来事によってであった。
その時、鄭知常は1首の詩を詠んだ。

寺で念仏を唱えると
空がガラスのように澄んでいる

金富軾はいたく感嘆して、それを自分に譲ってくれまいかと言ったが、軽く断わられた。
腹を立てた金富軾は、自分よりずばぬけてすぐれた詩才の持ち主をなんとか無き者にしようとひそかに企んだ。
その後の1135年、平壌生まれの高僧妙清をはじめとする西京地方の両班（貴族）のクーデターが起きたが、失敗する出来事があった。
金富軾はこの時、鄭知常に妙清と内通していたという濡れ衣を着せて処刑するようにしてしまった。
鄭知常がいなくなると、金富軾は自分を凌駕する詩人はもはやいないとして喜び、うぬぼれた。
そんなある日のこと、彼は1首の詩を詠んで得意になった。

千本の柳の枝は青々
万点の桃の花は赤々

この日の夜、彼は興に乗って詩を吟じているうちに眠りに落ちた。

ところが夢の中に鄭知常が現れて、金富軾の横っ面を張り飛ばして、叱り付けた。
「千本か万点か、貴様は数えてみたのか。こんなものを詩だなどと言ってうぬぼれているのか」
鄭知常は金富軾が顔も上げられないほどののしり、詩を直してやった。

一本一本　柳の枝は青く
一輪一輪　桃の花は赤い

直された詩を詠んだ金富軾は顔を赤らめてうなだれた。
言い伝えによると、金富軾は自分よりすぐれた有能な詩人を死に追いやったことへの不安と恐怖にさいなまれた末、ある日、かわやで急死したという。

「貧乏を気に病むでない」

高麗(918年から1392年まで存続した朝鮮の封建国家)時代の武人咸有一は、胥吏（下級役人）の頃から侵略軍との戦いにしばしば出兵して大きな手柄を立てていた。そのうちに武官に取り立てられ、今では王宮を護衛する部隊の指揮官を務めていた。
ある日、王は兵士たちの訓練を見るべく練兵場に現れ、大きな賞を授けるから、武官の弓術の試合を見ようと言った。
試合に出場した咸有一は断然優勝し、大量の金の延べ棒と何疋もの絹を賜った。
町に出ていた咸有一の二人の子がその噂話を聞いて一目散に家へ

帰って母親に伝えた。
「お母さん、うちに大きな祝い事が生じました」
「え、祝い事？　一体どういうことなの」
「お父さんが武術の試合で1等をして、王様から多くの金の延べ棒や絹を賜ったそうです」
「えっ、本当なの、それ」
「今、町中がその話で大騒ぎをしているのよ」
「お前たち、何か聞き違えたんじゃないの」
「ううん、はっきりお父さんの名を言って騒いでいたんだもの。あの人たち、あたしたちを見て、お前たちは咸武官の子たちなんだろうと言って、本当によかったね、と喜んでくれさえしたのよ。ねえ、お兄ちゃん」
「まあ、本当かい」
「それからこんなことも言ってくれたのよ。『お前たちのお父さんは正直で勤勉な上、ひたすら軍事にだけ励んでいるもんで、お天道様も感動してそんな福運を恵んで下さったのだろう』とね」
「それにあるお婆さんはこんなことまで言ってくれました。『ねえ、お前たちはもう、この世の何も羨むことがなくなった。あれだけの金の延べ棒や絹なら、何代も苦労せず遊んで暮らしても余るだろうからね』と羨ましがっていましたよ」
わが子らの熱心な説明に母親はその話をすっかり信じ、目に涙を浮かべて言った。
「まあ、わたしたちにも福が巡ってきたのね」
「お母さん、なんで涙を流すのよ」
娘が母親の胸に抱きついて言った。
「いやいや、あんまり嬉しくてね」
「ふん、お母さんは泣き虫だわ。この前はお兄ちゃんが大きく

なっていくのにお嫁さんを貰うだけのお金がないと言って悲しんでいたくせ、今日は金の延べ棒や絹がどっさり入ってくるのに、なんで泣くのよ」
「え、え、この母さんは本当に泣き虫になっちまったようね」
「母ちゃん、泣いちゃ駄目よ。お兄ちゃんがもう安心してお嫁さんを貰えるんだもん」
「そうね。兄ちゃんの結婚の準備もできたし、お前の嫁入りの心配もなくなったのだからね」
「あら、あたしのものも？　まあ嬉しい」
母親の膝の上に抱かれて甘える妹の様子を眺めていた兄は、あきれたように言った。
「おい、王様はお前とおれの結婚を気づかってお父さんに賞を下さったと思うのか。ばかなやつだ」
こう言って彼は母親に向き直った。
「お母さん、お父さんが賜った賞はまっさきにお父さんとお母さんの服を作ることに使わんといけませんよ。
ぼく、お父さんがいつも見すぼらしい身なりで外へ出るのを見ると、恥ずかしくてたまらないんだ。それでも宮中に仕える官吏なのに、何が不足でほかの人たちのように立派な身なりが出来ないんです」
「そうね、お前の言うことは当たっている」
「それにこの家も少し大きく建て直し、馬も数頭飼い、他人のように土地も買おうよ」
「そう、それも間違っていない」
「実際お父さんが宮中に勤めている間に、財産を増やしておくべきですよ。今のような状態のままで、お父さんが病気にかかって起き上がれなくなったり、お役目を解かれたりしたら、ぼくたち一家

は二度と再び浮かばれなくなりますよ」
「まあ、お前はいつの間にそんなに世事に明るくなったのよ」
「そりゃ当然ですよ。他人の家の暮らしぶりを見ていたら、そんなことはすぐに気づくもん」
「そうね。お父さんがお帰りになったら、みんなでよく相談してみようね」
「相談だなんて。お母さんがお父さんにはっきりそう言ったらよいものを」
「え、え、そうしようね。……あら、大変だ。もう暗くなりだしたよ。お父さんがすぐお帰りになる。早く出迎える支度をしないと」
「お母さん、ご馳走をうんと作るんだよ。鶏も1羽つぶしてね。ぼくは家の庭をきれいに手入れするから」
「そう。そしたらお父さんも喜ぶだろうよ」
こうして兄は庭を掃き、妹は室内を片付け、母親は台所で特別な料理を作るために立ち回った。
夕日が西の山に落ち、空が夕焼けに染まった頃、咸有一が帰ってきた。
「お父さんのお帰りだ—」
庭の手入れをしていた息子の声に、母親も娘も庭へ出てきた。兄と妹は父親の前へ進み出て、大きなお辞儀をした。
「お父さんの栄誉をお祝いします」
「お前たちも知っていたのか」
咸有一はにこにこし、二人のわが子を両腕に抱いた。
「本当にわが家の大きな慶び事ですわ」
妻の言葉を受けて彼は言った。
「わしもこんな思いがけない栄誉に預かるとは思いもしなかった」

みんなが部屋に上がって座ると、息子が真っ先に口を開いた。
「お父さん、今日賜った賞は大変な物だったそうですね」
「うむ、大量の金の延べ棒と何疋もの絹だった。このお父さんはこれまで一生の間に、あんなにも大きな賞を授かったのは初めてだ。実際誰もがみな羨み、感嘆してやまなかったからな」
「それらをいつ持って帰られるんですか」
「いや、それはわが家に持って帰るものじゃない」
「え？」
みな唖然とした。
「それ、お父さんが授かったもんじゃないんですか」
娘が尋ねた。
「それらは王様がこのお父さんに下さった物さ」
「だったら、どうして持ってこないんです？」
「はは、それはお父さんが授かった物だけど、持ち帰ってはならんものだ。それらの金の延べ棒はみんな売って、兵士たちの貧弱な炊事器材を一新し、同じように絹も売ってわが兵たちの軍服を1着ずつ作り、装備も新しい物に変えることにしたのだ」
「……」
妻も子どもたちも唖然として顔を見合わせた。
「いや、どうしたのだ。このお父さんの取った処置が気に入らんのか」
妻が涙に濡れた声で、なじるように言った。
「あんた、あんまりです。この子たちはあんたの健康な時に生活の元手をなんとかしっかり整えておかなければと気づかっているのに、あんたはどうして家庭の生活にこの子らほどの関心も向けないのです」
「ほほう、そういう訳だったのか」

咸有一はみんなを見回してから、語を継いだ。
「なあ、お前も先刻承知の通り、わしは貧しい家庭の生まれではあるが、これまで他人の情けにすがって生きてきたのではない。ただ勤勉、正直に生き、お国に尽くし人民のために働こうという思いさえ忘れなかったら、なんで貧乏を気に痛むことがあろうか。この子たちに財産を残してやれないことよりも、このような志を植えつけることが出来なかったらと、ただそれだけが気がかりだ」
「……」
家族の誰もそれに答えず、ただ押し黙っていた。
もしこの時、咸有一を祝って同僚や隣近所の人たち、それに配下の兵士たちが庭が埋まるほど押し掛けてこなかったとしたら、この家では一晩中重苦しい沈黙が続いていたかも知れない。

清廉潔白の夫妻

高麗の義宗の時代に兪応奎という官吏が南京太守に任命された。
当時の国情は、両班たちが学問を重んずるとして空理空論を事とし、放縦に流れて、政治の乱れが激しくなる一方であった。それに地方長官に赴任した官吏のほとんどが、私欲に駆られて、住民の財を手当たり次第に収奪して私服を肥やしていた。
このような世情で当時兪応奎のように清廉潔白な官吏が存在していたのは、幸いなことであった。
兪応奎が南京に赴任すると、当地の役人たちは新任の太守に取り入ろうとして躍起になった。
ある役人が彼の所にやって来て一包みの金を差し出した。
「ふむ、これは幾らほどになるのか？」

「大した額ではございませんが……」
「すると、その方はこれまでも百姓たちの財を取り上げてはその一部を太守に差し出していたようだな。今後また、このようなことが繰り返されたら容赦しないと思うがよい」
役人は驚き、金の包みをふところに納め、ほうほうの体で退散した。この出来事を伝え聞いた他の役人たちは、一人として賄賂を持ち込むようなことをしなかった。
そのしばらく後、次のような出来事があった。
太守の妻が乳腺の病気を病んだあと、食欲をなくしていた。けれども、肉類や魚を買うだけの金もなかった。
見かねた役人の一人が1羽のキジを太守の召し使いに与え、これを自分が持ってきたなどとは絶対に明かさずになんとか召し上がるよう努めてくれと言った。
召し使いは奥方に会って、親類の家でこのキジを分けてもらったと言いつくろって差し出した。
ところが奥方は彼にそれを持ち帰るようにと、きびしく言った。召し使いは隠し切れなくなってありのままに話した。
奥方は笑って、「お前が私のことを思ってくれる気持ちはよく分かる。それにこれを贈ってくれた人が、私の病気を気づかい、親切にもこのような物を贈ってくれたことには感謝のしようがない。でも、これを食べたからといって食欲がつくわけでもない。まして、私がちょっとばかし贅沢をしたせいで、これまで守ってきた太守の清廉の徳が汚れては、私の面目が立たなくなる。だから、これはその人に礼を言ってお返ししてくれ」
召し使いはかぶりを振った。
「奥様、これは何かの進上品ではありません。たまたま何羽かのキジが手に入ったので1羽分けてもらって持ってきたのにすぎない

そうです。近所づきあいで食べ物を分け合って食べるのが、どうして人のそしりを受けることになりましょうか」

「私の主人が太守の地位になかったら、近所の人が病気見舞いに持ってきてくれた食べ物を頂いても、それを悪いことだとどうして言えましょうか。でも今は事情が異なる」

召し使いはやむなくキジを贈り主のもとへ持って行った。

召し使いを送り返した役人は、感嘆して言った。

「この国にあのような人が10人だけいても、わが国はどんなに幸いだろうか」

平壌で号泣した詩人

金黄元は高麗時代の有名な詩人で、全国の名勝を遊覧して、秀麗な山川の美をいろいろと詩に詠んでいる。

ある年の夏、平壌の麗しい景勝が一望の下に見渡せる牡丹峰の浮碧楼に立った彼は、清流壁と平壌城を巡り流れる清く澄んだ青い大同江の水と、その向こうの薄いもやの中に広がる野原をうっとりと眺め、いつまでも立ち尽くしていた。

「ああ、世にはこんな絶景もあるのか！」

彼はただ感嘆するばかりであった。

有名な詩人金黄元が平壌に現れたと知った城内の官吏や文人が牡丹峰に押しかけ、詩人に平壌の絶景をたたえる詩を1首残してほしいと要請した。

金黄元は浮碧楼の柱や梁に雑然と掲げられている額入りの詩を見渡して眉をしかめた。それらはどれ一つとして、平壌の風景をありのままに描写するには程遠いものだったのである。

彼は、自分が平壌の絶景をたたえる詩を1首残すから、あれらの額はみな下ろしてしまうようにと言った。

楼の柱に片手を当てて詩想を練っていた彼はやがて、筆を持ってくるようにと言った。

彼は人々の注視する中、筆を力強く揮った。

長城一面　溶溶水
大野東頭　點點山

ここで詩人の筆はぴたりと止まった。筆を手にしたまま楼の下方をじっと見つめていた彼は、再び筆を絹布の上へ持っていったが、筆を取る手がこわばってしまった。

浮碧楼から見下ろす大同江の青く澄んだ水は、あたかも清い海原を思わせ、自分はその底から浮き上がった竜宮のあずまやに立っているような思いがし、遠く薄いもやに包まれた野原を望見すると、雲上に浮かぶ天宮の欄干にもたれて立っているような思いにとらわれた。

見るほどに新しく感じられる風致を数筆の詩句によって表現することは到底不可能であった。

金黄元が筆を止めたまま苦痛の色を現し、額に汗をにじませている様子を眺めていた人たちは、日が西に傾くと一人二人とその場を静かに離れていった。

日が沈む夕焼けの映える浮碧楼に一人残った詩人は遂に筆を投げ出してしまった。

「ああ、平壌の絶景を詠むには、わしの詩才はあまりにも乏しすぎる」

詩人は号泣し、夜遅くまで涙を流していた末、悄然として浮碧楼を後にした。

その後、平壌の人たちはその未完の詩を額に納めて浮碧楼に掲げたが、今日それは大同門の近くの練光亭に移されている。
それが、ほぼ900年経った今日までもそのままに伝えられているのは、未完の詩そのものがすぐれていることもさることながら、あれほど世に聞こえた詩人さえも詩にこめえなかった平壌の絶景を誇り続けたいという、平壌の人たちの思いを叶えることにその目的があったのである。

唇に刺さった矢

高麗末期の名将崔瑩（1316～1388）が70歳近くになっていたある年のこと。当時、海辺に倭寇がひんぴんと出没して住民を殺害し、財物を略奪していた。これを捨ておけず、王は朴仁奎将帥を差し向けたが、戦いに破れて戦死した。倭冦はますます増長して思いのままに横暴を事とした。
我慢ができなかった崔瑩は、自分が出陣すると王に願い出た。
王は、その年齢では到底無理だとして許さなかったが、あくまでも主張する彼の言葉に負けて出陣を許した。
現地に到着した崔瑩は、当地方の兵士たちを一つにまとめて倭寇との戦いに向かわせた。
賊兵の士気は高かった。
崔瑩は軍鼓を打ち鳴らして、突撃を命じたが、樹林にこもり大岩を盾にして矢を雨あられと放つ敵の気勢に恐れをなした兵士たちはたじろいだ。
崔瑩は歯がみした。状況はただごとでなかった。こんな場合、接戦を避け、機を見て戦い直すことも考えられないわけではなかった。

けれども彼は決意をひるがえさなかった。ここで退却すれば倭寇はいよいよ増長し、部下の兵士たちは戦いが不利だと気落ちしてまごまごすることに慣らされてしまう。
崔瑩は決然として叫んだ。
「我に続けっ」
彼は馬上から矢を放ちながら、敵陣に向かって突進した。兵士たちがこれに続いた。
この時、敵の放った矢が崔瑩の唇に突き刺さった。唇から血がしたたり落ちたが、彼はそれに構わず、矢を放ちながら突進を続けた。矢は狙い違わず次々に敵兵を倒した。
倭寇は恐怖に駆られて退却し始めた。高麗兵は勢いを得て、崩れる敵陣に突入した。敵兵はあわてふためいて逃げ出した。
敵兵が弓矢を捨てて逃げるのを見た崔瑩は、唇に刺さっていた矢を抜き、彼を取り巻いた部下たちに言った。
「戦いに出て立った兵士が敵兵より先に怖気づいたら、どう戦いに勝てるというのだ」
恥ずかしげにうなだれていた将兵は、常勝将軍崔瑩の軍略が何に根ざしているかを今さらのように悟った。
すぐれた戦法と相まって、敵軍の威力に恐れることなく、1本の矢さえ余計に射なければならないとして、唇に刺さった矢も抜き取ろうとしなかった豪胆な崔瑩将軍……。

10年後に知った「聖人」

壬辰祖国戦争（豊臣秀吉による朝鮮侵略戦争。1592～1598）が勃発する10年前の1582年9月のある日、右賛成という地位の文官李珥

（1536～1584）が王に進言した。
「今、北辺の情勢はもとより、日本国内の動静も尋常でないように見受けられます。10年を越えず、わが国が思いがけない事態に遭遇する恐れがあります。思うに、10万の兵を養うべきではなかろうかと心得ます」
「10万の兵じゃと？」
王は驚いて聞き返した。
つい今しがた昔の聖人が残した「徳」や「礼」について論じたばかりなのに、この太平の世に養兵とは何事かという思いがそこにこもっていたが、李珥は自分の提言を具体的に聞きたいのだろうと思って説明を加えた。
「10万の兵を養うには、徴募した壮丁に交代で6カ月ずつ訓練を与えることです。
このように訓練を施し、首都城と各道、各城の守備に当たらせるならば、いかなる不意の事態に際しても、訓練で鍛えられた10万の壮丁を出動させれば何物をも恐れることはありません。
このような準備を行わないでは、変に際して訓練を受けていない者たちをあわてて戦場に送り出すほかなくなり、そうなればすべてが後の祭りとなるでしょう」
王はこの思いもかけない提言に答えるすべを知らず、しばらく黙然としていたが、並居る臣下を見回した。
「その方たちは、右賛成の提言をどう考えるか？」
誰もみな、思いがけない李珥の主張に対して、王と同様答えるすべを知らず押し黙っていた。
「ではその方たちの考えも右賛成と同じだというのか」
王のこの督促に柳成龍（1542～1607）が一歩進み出た。
「右賛成のこの提言そのものに間違いはございませんが、何事

であれ時期を違えずに行うべきが至当でありましょう。現時におけるような天下太平の時にそのような方策を取るのは適切ではございません。今のような時代にもし10万もの徴兵を不意に行うならば、全国の人心を騒がせ、むしろ将来に禍根を残さないとも限りません」
王は柳成龍の意見を聞いて座中を見回すと、大勢の者が同感を示しているようであった。
「10万の養兵は時宜に適ったものとは言えないから、受け入れるわけにはいかぬ」
こう王は結論を下した。
王の前を退出する際、李珥は柳成龍に言葉を掛けた。
「古書に埋もれている一般の儒生たちが今日の時局にうといとして非難をしてもせんないが、貴公がそんな主張をするとはな。野良仕事をする百姓でさえ、1年の先を見越しながら生きている。いわんや国事に参与している貴公のごときが10年の先も見通せぬとは、恥ずかしいとは思わんのか」
柳成龍は、この言葉に顔を赤らめたが一言も返さなかった。
その10年後の1592年、遂に日本侵略軍は釜山に上陸し、ここに壬辰の乱は勃発した。
その時李珥はこの世の人ではなかったが、柳成龍は頭をかかえて慨嘆した。
「ああ、李栗谷（栗谷は李珥の号）こそは今日の聖人だったのだ」
あの日、李珥の提言を積極的に支持しなかったことに彼はほぞを噛んだが、それはもはや後の祭りであった。李珥が今はもうこの世に生存していないと思うと、胸はことさらに痛んだ。

機密はどこから洩れたのか

1437年のある日、国王世宗は激怒した。

「一体なんたることじゃ。北方の辺境から送られてくる密書が宮中に届きもせぬうちに内容が全市の噂の種となり、ここ宮中から送られた極秘の指令が咸鏡道の節制使に届く前にその内容が北辺の全域を騒々しく駆け巡っているなどとは。一体国に綱紀はあるのか」

王の憤激は当然であった。

当時、朝廷では外敵の侵入を防ぎ北辺の守りを固めるべく、金宗瑞（1390～1453）をその任に当たらせ、もろもろの対策を立てていた。

ところが、金宗瑞が辺境におもむいて情勢を確認して帰ると、それが王の耳に入る前に早くもソウルの市中に噂が広まり、人々は今に大々的な徴兵が行われ、遠からず戦争が起きるなどと騒ぎ、王が金宗瑞に敵を牽制すべき秘密の指示を与えると、辺境の兵士や住民が早くもその内容を知って騒然とし、はなはだしいことには敵がそれを知って兵を引き揚げたり、防備を固めたりすることさえあった。このような大事を放置してよかろうかとして王は臣下を前にして言った。

「国事を誤らぬためにも、また、国の綱紀を確立する上でもそうであるが、機密を洩らす者どもを早く見つけて厳重に処置し、万人の見せしめにせざるを得ぬ。……

さて、機密の出所を捜し出す任を引き受ける者はおらぬか」

それは広い草原に落ちた一粒の粟を見付けよと言うにも等しい難題である。王が返答を促すと、お互いに顔を見合わせていた大臣たちの視線が一様に領議政（宰相）黄喜に向けられた。

黄喜はやむを得ず一歩進み出た。

「私めに10日間の余裕を下さるならば、必ずやその出所を突き止めてご覧に入れます」

こう王に答えた黄喜は他の臣下とは一言の相談もせずに帰宅した。

翌朝、彼は習慣通り、はばかりで用を済ませて自室に戻ったが、顔色を曇らせて朝食にほとんど手をつけなかった。

妻が不審に思い、どうしたのです、何か心配事でもあるのですかと聞いた。

こう何度も尋ねられて、彼は答えた。

「さっきはばかりで用を足していたら、この尻から青い鳥が抜け出して空の向こうへ飛んで行ったのだ」

「えっ、青い鳥ですって？　まあ、鳥があなたのお尻から？」

「そうだ。なんという奇怪なことだ」

「ねえあなた、宰相たる人のお尻から青い鳥が飛び出したなどということが世間に知れたら大変ですから、どんなことがあってもよそ様に話してはなりませんよ」

「はは、わしがどこでそんなことを話せよう。心配することはない」

その日の夕方、宰相夫人は女中を相手に洗濯物の手入れをしていたが、途中、ふと夫のお尻から青い鳥が飛び出したという話を思い出して、くすっと笑った。

女中は、自分のことで笑ったのではと思い、何がおかしいのですかと尋ねた。

「ねえ、世の中には本当に妙なこともあるもんだよ。今朝うちの人がね、用便中になんと青い鳥が2羽もお尻から抜け出して飛んでいったそうよ」

「まあ、青い鳥がですか？」

「そうなの。でもね、お前、そんなことを誰にも話すんじゃないよ」

「あたしが誰にそんなことを……。宰相様のことですのに、ご心

配には及びませんわ」
　その夜、夫と一緒に床についた女中が青い鳥の話を思い出して、くすくす笑った。
　夫は、妻が間男と通じ、その最中のことを思い出して忍び笑いをしているのかと思い、何を笑っているのだと執拗に聞きただした。
　女中はとうとう隠し切れなくなり、青い鳥の話をしてしまった。
　「なんだと？　宰相の尻から青い鳥が4、5羽も飛び出したと言うのか」
　「ねえ、外へ出てそんな話を決して誰にもしちゃなりませんよ」
　「おれがそんな話を誰にするものか。心配はご無用だ」
　翌日の昼、女中の夫は友人たちと連れ立って露天市場の酒場へ行き、酒を酌み交わした。そんな時、1羽のスズメが窓辺に降り立ったかと思うと、すぐに飛び去った。そんな様子を見た男は、昨夜妻から聞いた青い鳥のことを思い出して、思わずはははと笑った。
　友人たちが驚いて、何を笑っているのかと聞いた。男はなんとも答えなかったが、みなが執拗に聞き、腹まで立てるので、仕方なく青い鳥の話をした。
　「なんだって？　宰相の尻から青い鳥が10羽も飛び出したと？」
　「なあみんな、ほかでこの話は絶対にしないでくれ。これが世間に知れたら、うちのやつが言いふらしたと知れるだろうから、大変なことになる」
　「心配するな。貧しいおれたちは義理をもって生きている。だからそんなことさえ守れないわけがあろうか」
　それから何日か経った。
　宰相に機密漏洩の出所を捜せと命じた後、王はその状況を知るべく、しばしば侍臣を市内に送り出した。
　ところが、黄喜が別段捜索らしきものを手配しているようではないとの報告を繰り返していた侍臣は、ある日、今市内には青い鳥の話が人々の中でささやかれていると報告した。

　「なんだと？　宰相の肛門から何千羽もの青い鳥が飛び出していると？」
　王は驚いた。
　「なんたることじゃ。ところで宰相はそのようなことがあったとなんで朕には話さなかったのだ。怪しからん」
　王はすぐ黄喜を呼ぶようにと言った。
　黄喜が姿を見せると、王は詰問した。
　「その方は何故に機密の出所を確かめよとの指示を無視し、しかも、その方の肛門から数千羽もの青い鳥が飛び出したとの妖言を振りまきながらも、朕には一言も申さなかったのか」
　黄喜は一歩進み出て口を開いた。
　「お言葉を返すようで恐縮ではございますが、国の機密が洩れた出所については、既に陛下はご存知になられたと存じておりました」
　「いつそれを朕に話したのじゃ。その間、その方はこの宮中へ出仕したことがあったとでも言うのか」
　「その青い鳥こそ、ほかならぬ国の機密を洩らした元凶でござります」
　「なんだと？　青い鳥が？」
　黄喜は、自分が考えて流した青い鳥の風説について具体的に説明した。
　「ふうむ、その1羽の青い鳥がわずか数日にして数千羽の子を生み、全市に広まったと言うのか」
　「さようでござります。今、国の機密が洩れ、綱紀が乱れているのは、ほかならぬ中央の官僚をはじめ地方の官吏までもがすべて私と同様、毎日のように青い鳥を生んでいるからでござります」
　王はふうむと大きくうなずき、直ちに全国の官吏に青い鳥の話を

伝え、厳重に口を慎むようにとして具体的な措置を講じた。
　それ以来、国家の機密が洩れることはなくなったという。

金時習の聡明

　金時習（1435～1493）は、生後8カ月にして早くも独りで書を読んだという。
　金時習は、3歳の頃には周囲の物事を判断しながら詩を詠むほどになっていたが、当時詠んだ詩のうち今日に伝えられている詩には次のようなものがある。

桃の花は赤く柳の葉は青い
春三月も暮れていく
青い針に通された玉は
松の葉に結んだ露

　金時習の聡明ぶりは次第に世に広く知られ、人々が毎日のように訪ねてくるようになった。
　ある日、丞相（大臣）許周が訪ねてきた。
　当時5歳の金時習は部屋で遊んでいたが、許周は彼を抱き上げて膝に乗せた。
　「なあ、わしはお前が見ても分かる通り年寄りだ。さて、どうかね、このじいさんのために詩を一つ詠んでくれまいか」
　許周をじっと見上げていた金時習は、すぐさま筆を取ってすらすらと書いた。

年取った木にも花が咲いたのに
気持ちが老いたなどと言えましょうか

　詩を詠んだ許周は驚き、神秘な思いにとらわれて、じっと金時習の顔に見とれていたが、不意に彼を高く差し上げてぐるぐる回りながら、「いやあ、生まれて初めて見る珍しい子じゃ。お前は確かに神童じゃ。神童！」と叫び、ただただ感嘆してやまなかった。
　このように聡明な金時習は、成人して科挙の文科に応試しようとしていた思いを捨てて剃髪し、仏門に入り山にこもった。
　当時、端宗を追い落として王位を簒奪した世祖は、たびたび人を送って、金時習に官位に就いて国政に参与するよう招いたが、彼はあくまでも謝絶した。
　金時習が友に書き送った手紙には、次のようなくだりがあった。
　「拙僧とこの世は性が合わず、あたかも円い穴に四角い棒を押し込もうということに等しいのだから、拙僧は山野を放浪して生きるほかない」
　この手紙を読んだ友や世人は感嘆してやまなかった。
　「彼の聡明は詩や書で輝きを見せるものとばかり思っていたが、この乱れた世をまっとうに見すえることで、一段と輝いている」

高官の行列を止めた5歳の幼児

　明宗の時代のある春の日。
　ある村の大道の際の丘の大樹の根方に、村の子たちが座って千字文を読んでいた。
　そんな時、道路の向こうからある高官のものものしい行列が近づ

いてきた。
　読書していた子たちは一斉に立ち上がり、行列を近くから見ようとして丘を駆け降りた。
　ところが、5歳になるかならぬかの一人の幼児は立ち上がりもせず、千字文を読み続けていた。
　近くを通りかかった高官は、一人残って本を読んでいる子に目を止め、感心な子もいるものだと思い、輿を降りて丘へ上がった。
「お前、ほかの子らはみんな行列を見物しているのに、なんでここに一人じっと座っているのだい」
　高官を不思議そうに見上げた子は、はきはきと答えた。
「父ちゃんから本を読むことだけ考え、ほかのことを考えたらいかんと言われています」
　この返答にほうと思った高官は、そのまま立ち去ることが惜しまれ、家はどこでお父さんは何をしているのかねと聞き、その子の家庭を訪れた。
「そなたのお子さんは尋常な子ではない。今にわが国にすぐれた学者がひとり現れるとわたしは信じて疑わない」
　こう言って幼児をひとしきりたたえてから高官はその家を辞した。
　高官を感動させた子の名は趙憲で、1544年6月の生まれであり、父の名は趙應祉、母は崔氏である。
　趙憲は幼い頃から行儀正しく、親思いで、村の子たちに混じって遊ぶことよりも、わが家で親の手助けをすることに余計精を出した。
　10歳の年で母親を亡くした時、彼はひどく嘆き悲しみ、葬礼の際のその振る舞いの大人びていたことに、人々は感嘆してやまなかった。
　その年から金滉に師事して学問に励んだ彼は、毎夜松ごっぱに火をともして読書をし、昼、野良仕事をする時は畑の畝に本を載せる棚木を立てておいて、一休みするたびに読書をした。

　成長した彼は科挙に合格し、奉常寺僉正（縦4位の官吏）を務めた。当時、日本の傲慢な態度に憤慨して日本との関係を断絶し、国力を強化すべしとする上奏文を王に送ったが、それが災いして島流しにされた。その後間もなく壬辰祖国戦争が勃発すると、義兵を起こして日本侵略軍と勇敢に戦ったが、惜しくも戦死した。

夫を目覚ませた妻

　1588年夏のある日、郭再祐（1552～1617）は、日が中天にかかるまで部屋に横たわっていた。妻が家族や近隣所の人たちに非難され、後ろ指を差されることほど大きな恥はない。彼はそのことで悶々としていた。
　先妻が痛ましくも重病を患い死亡したあと、40の歳の前年冬、李氏を後妻に迎えた。
　李氏は嫁に来て3日の間は何事もなく過ごしたが、4日目からは毎日昼寝をしだした。昼時気休めにちょっとの間居眠りをするのは何もとがめ立てされるほどの疵ではなかろうが、彼女はそんな程度ではなかった。朝の膳を片付けると、部屋に枕を置いて横になり、昼目を覚ますとひと碗飯をかきこんでまた横たわり、いびきまでかきながら眠るのだった。時には昼食もとらずに朝から一日中眠っているようなことさえあった。
　郭再祐は本来豪放な性格で義侠心に富み、友人も多かったので、若い頃から彼らとともに書に親しみ、酒も酌み交わして日々を過ごしていた。李氏を後妻に迎えてからも、日中は外に出ていたせいで、妻がそんな寝坊助だとは気づかなかった。けれどもやがて、家族たちの非難をしばしば耳にし、近所の人たちまで後ろ指を差して

いることを知った。まさかと思いながらある日部屋をのぞいてみると、確かに妻は昼寝をしている。とにかくしばらく様子を見ることにして、その時は妻になんとも言わなかった。

ところが日が経ち、月が変わっても妻は相変わらず昼寝ばかりしている。結婚後100日ほどしたこの日、とうとう腹にすえかねて、すぐにもその悪癖を直してやるか、それが駄目なら追い出してしまおうと決心した。

彼は、家族たちが働きに出て誰もいない日中のこの時に妻に話を聞かそうとして彼女の部屋へ入った。

妻は相も変わらず床に横たわって眠っている。袖で顔を半ば覆い、甘い眠りに落ちているのか、障子を開け閉てする音にも気づかずにいた。

こみ上げる怒りを抑えて彼女の肩をゆすると目を開き、誰が自分をゆさぶったのかと見上げ、それが夫だと知ると、あわてて起き上がり、かたわらに座った。

「おい、一体なんたるざまだ」

郭再祐はじゅんじゅんと話して聞かせようとした思いはどこへやら、怒りを爆発させた。

「夫に恥をかかせるのはまあ我慢もできようが、この家をなんたるざまにしようとしているのだ」

「……」

郭再祐は今にも飛びかからんばかりの勢いで怒鳴ったが、妻は乱れた髪をなで、チョゴリの前身ごろをいじるばかりだった。自分の言葉に耳を貸そうともしない妻の態度に彼は憤然とした。

「おい、なんとか言え。お前はこのおれに仕え、わが家に尽くそうとしてここへ来たのか、それともおれを悩ませて死に追いやり、この家を滅亡させようとして来たのか」

「あたしに、何か大きな間違いがあるとおっしゃるのです？」

「おい、主婦が家事をないがしろにし、野良に出て働こうともせずに、昼寝ばかりしているのがちっとも悪くないと言うのか」

「主婦が昼寝ばっかりしていたら一家が大変なことになるというのは確かです。でも一家の暮らしも、お国が滅びることのない時にだけ成り立つのじゃないでしょうか。鳥の巣がつぶれたら、その中のたまごは無事でいられましょうか」

「なんだと？」

「今、鳥の巣と同じだと言えるお国に北と南から外敵が襲いかかろうとしていますのに、ちっとも心配しないで本ばかしを読みお酒にひたって日々を送っている人たちに対しては誰も叱りもせず、過ちをただそうともしないで、この鳥のたまごみたいな家がめちゃくちゃになるなどと、よくもあたしを叱っていられるものですね」

「え？」

郭再祐は思いがけない妻の指摘に驚いた。彼女の言葉が胸にこたえ、二の句が継げなかった。妻の言葉は正しかった。彼は仲間と連れ立って書を読み、酒を酌み交わしてばかりいるが、近頃、海の向こうでは日本軍が朝鮮に押し寄せようと狂奔している。そのことを知りながらも、国防は王宮がなすべきことだと思い込んでいた。

主婦が昼寝ばかりしていては家が乱れると考えるばかりで、一家のあるじであるおのれが酒にひたり、書ばかり読みふけっているだけでは、国の危難は防げず破滅するほかないということにまでは考え及ばなかった。

ひと言も返せず部屋を出た郭再祐は、その後酒をきっぱりと断ち、仲間と語らい、農楽や鷹狩りなどをもって若者たちを集め、武術の修練を積んでいった。

彼の妻もその日以来昼寝とはすっかり縁を切り、朝早くから日が

暮れるまで、家事はもとより、野良仕事も自分一人の力で行い、夫の武芸の修練を陰から支えた。
　数年後壬辰祖国戦争が始まると、郭再祐は義兵をつのって日本侵略軍とめざましく戦い、義兵長の名を世にとどろかせた。

朝鮮の「宝」

　壬辰祖国戦争の際、咸鏡道の義兵長松雲大師（四溟堂）が単身敵陣に乗り込み、敵将加藤清正と談判した時のこと。
　加藤清正は松雲大師に聞いた。
　「朝鮮には宝物が多いと聞いているが、どのような宝が特にすぐれているのか」
　松雲大師は泰然として答えた。
　「朝鮮に宝が多いのは事実だ。だが、今それらの宝の中で最上の物はかえって日本にある」
　「日本にあると？」
　「まだ分からんのか」
　「何だ、それは」
　「それはほかならぬ貴公の首だ」
　「なんだと、拙者の首？」
　「何を驚いている。わが国では貴公の首を討ち取った者に莫大な賞金を与えるとしている。ゆえに、それこそ宝の中の第一の宝でないなどとは言えはしまい」
　顔色を変えた加藤清正は、しばらく口も開けなかった。松雲大師の気概に圧倒されて、それまでの傲然たる態度は消え失せてしまったという。

朴多知

　壬辰祖国戦争の際、平壌城を守って戦った平壌10勇士の一人である朴多知の本名は朴億である。知恵がとりわけすぐれているとして、彼はいつしか人々から多知と呼ばれるようになっていた。その特異な知恵によりさまざまの手柄を立てているが、王城灘の戦いであげた功績は彼の名をいよいよ高からしめた。
　1592年6月、日本侵略軍が大同江の向こうに近づくと、平壌城の守備軍と義兵は敵軍の渡河をまず防ぐべく、大同江の浅瀬を守ることにした。
　平壌10勇士の指揮する義兵は王城灘の守備を任された。
　彼らは戦いの準備がまだできていなかったので、朴多知の指揮する義兵が先に行き、王城灘の岸に防御陣地を築くことになった。その数日後、弓矢や槍、刀剣などを揃えた後続隊が現地に到着した。
　ところがなんと、先発隊は浅瀬王城灘の前に陣を構えているのではなく、その下手の水の深い場所の岸辺の処々にのぼりを立てて防壁を積んでいるのである。
　「おい、一体どうしたわけだ」
　「なに？　陣地をでたらめに作っているとでも言うのか」
　「でたらめどころか、われわれの守る王城灘はここじゃなく、あのもう少し上の方じゃないか」
　「ははは、平壌っ子のこのおれが王城灘の位置も知らないと思ってるのか」
　「では、なんでこんな所に陣地を作ってるんだ」
　「もちろん王城灘を守るためさ」

「なんだと？　王城灘を守るんなら、その岸辺に陣地を作らなきゃならんのに、敵軍が渡ってもこないこの深い川の前になんで陣地を構えるのだ」
気性が荒く、相手構わずずけずけものを言うことで「向こう見ず」と呼ばれている玄受白はあくまでも問い続けた。
冗談好きの朴多知はにやにやして答えた。
「そりゃ、われわれの考え通りに敵が動くだろうから、ここに陣を構えるのさ」
「え？　敵がわれわれの考え通りに？」
これに朴多知が答える間もあらず、「日本軍が現れた！」という叫び声があちこちで上がった。
果たして、向こう岸の土手の先に白っぽいほこりを立てながら数百の軍勢が駆け上がってきている。
義兵たちは、王城灘の岸に陣を移せぬまま、ここで敵と戦うほかなかった。一同は敵軍が自分たちの陣地を見向きもせずに王城灘の方に向かうのではと、いらいらとその動きを見守った。
ところが敵軍は王城灘の方へは進まず、のぼりがひるがえるわが軍の陣地の対岸で立ち止まり、やがて鳥銃を撃ち始めた。
義兵たちは朴多知の指揮に従い、弓矢をもって応戦した。敵兵は気勢を上げて、ますます激しく鳥銃を撃ち続けた。
頃合いを見計らった朴多知は、矢の発射を次第に減らし、力を弱めて矢が対岸に届かないようにせよと命じた。
敵の攻撃におじけて浮き足立っているかのように見せるためであった。
しめたと思ったのか、敵将の命令で日本軍は一斉に川に飛び下り、こちらへ向かって泳ぎ出した。敵兵のすべてが川に入り、前進しだすと、朴多知は一斉射撃を加えよと命じた。

水面に頭をもたげて泳ぐ敵兵は矢の襲来を避けることができず、一人、二人と水中に没し始めた。川の中ほどにも至らず次々に溺れるのを見て、後に続く残りの敵兵は命からがら逃げ出したが、その数は数えるほどにしかならなかった。
戦いはわが方の快勝に終わり、万歳、万歳を叫ぶ玄受白の肩をとんと叩いて朴多知は言った。
「どうだね。敵軍はわれわれが浅瀬を守っているものと信じて疑わなかったじゃないか。そうでなかったら、どうしてわれわれが守っていないあの浅瀬は見向きもせず、われわれが守っているこの深い川の中へ飛び込んで押し寄せたのだ。ははは」
義兵も他の10勇士もみな、日本軍にひと泡吹かせた朴多知の知略に感嘆してやまなかった。

笠を買いながら

申在孝（1812～1884）は友人と連れ立って笠を買うべく、露天市場に出掛けた。
彼はある笠売りに尋ねた。
「笠を売るんですか。値段はいくらですか」
笠売りはそうだと答え、値はしかじかだと言った。
申在孝は気に入った笠を選び、代金を払った。
「有難うございます。大事に使います」
申在孝がこう言って歩き出すと、友人は苦々しげに言った。
「おい、一体なんたることだ」
「何がだ？」
「笠作りの職人風情に向かって両班たる者がなんたる話しぶりだ」

「わしがあの笠職人に敬語を使ったとしてなじるのか」
申在孝はからからと笑った。
封建時代、両班（貴族）は平民に敬語を使うことは絶対になかった。とりわけ下層の職人は人間扱いをされず、ひどく卑下されていた。
ところが、両班の申在孝が笠作りの職人に丁重な言葉づかいをしていたのだから、友人があきれて顔をしかめないわけがあったろうか。
からからと笑った申在孝は言った。
「なあ、わしが間違えているんじゃなくて、この世の習わしが変になっちまっているのさ」
「この世の習わしが変だと？」
「卑しい職人だとして軽蔑し、ばかにしながらも、そんな人たちが作った笠を両班は自分の頭の上に頂いて歩いているんだからね」
友人はその言葉に返すすべを知らず、苦笑いをするだけだった。

公平な判決

咸致宇という官僚が監司を務めていた時のある日、若い両班の兄弟が官衙に訴え出た。二人は大小二つの釜を持ってきており、両人がともに大きい方の釜を自分の物にすると争い、決着がつかなかったので、判決を下してほしいと言うのである。
監司がそれらの釜を何故に兄弟同士が自分の物だとして争っているのかと問うと、父親が遺言一つ残さず急病で亡くなったので、家産をきっかり二分して持つことにしようとしたが、二つの釜の大きさが異なるので問題が生じたのだという。兄は総領の自分が大きい方の釜を持って当然だとし、弟は差別なしに分けようと約束したのだから、約束通りにしようと言って譲らなかった。

両人の主張を聞いた監司は嘆かわしげに言った。
「いやはや、両班たる家門の子弟の道義がこんな風では、世の名分をいかに守れようか」
苦笑いした監司は役人に命じた。
「その二つの釜を打ち砕き、秤にかけて平等に分けて与えるがよい」
驚いて顔を見合わせていた兄弟は、監司に向き直り、訴訟を取り消すと言った。しかし、役人は指示通り二つの釜を叩き壊し、秤にかけて二人に平等に分け与えた。
鉄の破片を渡された兄弟は泣きっ面をして引き下がった。

一張羅の洗濯物

ある日の夜、用があって平壌城内に出掛けていた鄭秀同が、通行禁止時間が迫っていたので、帰宅を断念し、友人の家で一晩止まろうとして、訪ねていった。
友人は彼を快く迎え入れたが、何か浮かぬ顔をして落ち着かない。
「どうかしたのか？　顔色がよくない」
「体調が悪いなら、そんなことぐらい平気だけどね」
「じゃ、何をそわそわしてるんだ」
「実は、明日は伯父の命日なんだ」
「それが、どうしたと言うんだ」
「法事は当日に行うものと思っていたが、近くの知り合いが命日の前夜に行うしきたりだと言ってくれたんだ。でもこんな時間なので……」

「うむ、そういうわけだったのか。今からでも遅くはなかろうに、早く出掛けろよ」
「だけど、もう通行禁止時間だから、どうにもならんのだ」
「何をくよくよしている。そんなことでまごまごせず、早く出掛けろよ」
「だけど、巡察隊につかまったら、法事に参加できないばかりか、どんなひどい目に合うか分からんじゃないか」
「なあ、つまらん心配をすることはない。いかに巡り合わせが悪いとしても、千に一つの可能性もない、巡察隊との遭遇を恐れることはない。もし途中彼らに出くわしたら、おれがなんとかしてやるから、一緒に出掛けよう」
この言葉に力を得た友人は、供え物を包んで立ち上がった。
二人が浅い月影の中を横丁伝いに土城廊の方に向けて急いでいた時、向こうから巡察隊がやって来るのに気づいた。かたきは一本橋で出遭うということわざ通り、こんな避けるに避けようのない狭い横丁で巡察隊に出くわすとは……。
「あっ、向こうから巡察隊がやって来る」
「うん、いいか。あの巡察隊をおれたちが来ていた方へ誘き出すから、君はこの陰に身をひそめていて、彼らをやり過ごして早く行くんだ。分かったか」
友人を物陰に隠した鄭秀同は、元来た道を白い外衣をはためかせながら、ばたばた足音を立てて走り出した。
夜のしじまを破って走る不審な男に驚かされた巡察隊は後を追って走り出した。
「やいつ、止まれっ」
5、6人の巡察隊は懸命に鄭秀同を追った。
巡察隊を誘引して横丁から横丁へと走っていた鄭秀同は、ある屋

敷の瓦ぶきの塀の上に跳び上がり、そこへうつ伏した。
巡察隊がきょろきょろしながら塀の下へ現れた。彼らは、間違いなくこっちへ逃げたのに急に見えなくなってしまった、不思議なこともあるもんだと言い合った。
その一人が塀の上を見上げて叫んだ。
「あっ、あれはなんだ」
「なんだと、何があるんだ」
「塀の上のあの白っぽい物を見ろよ」
「ふむ、おれたちが逃した者じゃないのか？」
「やいつ、早く下りろ」
一人の巡警が鄭秀同を警棒で突いた。
「おや、なんだって手出しするんです？」
鄭秀同は腹立たしげに叫んだ。
「おい、貴様はなんだってそんな所へいるんだ。さっさと下りろ」
「これは洗濯物ですよ」
「何？　洗濯物だと？　ははは、洗濯物も口を利くのか」
「一張羅の洗濯物ですよ」
「一張羅の洗濯物だと？」
「それもご存じないんですか。着替えがなくて、着たきりで洗い、そのまま乾かしている最中なんですよ」
「そんなら川辺のどこか乾燥した所に寝転んで乾かせばよいはずだ。なんでこんな遠くまでやって来て乾かしてるんだ」
「そりゃ当然ですよ。この城内に夜中それなりにあったかい熱を出して一張羅の洗濯物を乾かせるだけの、この黒い瓦をふいた塀よりよい場所がどこにあるんです」
「な、なんだと？」

「そんならもし、ここよりよい場所を教えて頂けませんでしょうかね。わたしゃこの服が乾かないと、あすの朝野良へ働きに出られなくなるので、ぐずぐずしちゃいられんのですよ」
巡察隊の者たちはあきれて、続ける言葉がなく、その場を立ち去った。
鄭秀同は彼らが消え去るのを見計らって友人の後を追い、その伯父の法事に参加した。それまでしんみりとしていた家族たちは、彼の一張羅の洗濯物の滑稽談を聞いて大笑いし、法要の場が笑いの場に変わってしまったという。

神妙な処方

朝鮮の著名な医学者である李済馬（1837〜1900）が、咸鏡南道の洪原に住んで医療を行っていた頃のこと。
ある日、金持ちが一人訪ねてきた。
李済馬は彼の訴えを聞く前に、その脈を取り、顔色をじっと眺めてから言った。
「胃病をわずらってるようですな」
「ええ、そうです。食べ物が胃にもたれて難儀しているのです」
「ところで、あなたの胃病は一日や二日で生じたものではないので、いかに良薬を使っても効き目はありません」
「ほう、私の症状を具体的に尋ねてみもせずにどうしてそのようにはっきり見抜いたのですか。私はこの胃病に長年苦しみ、野生人参、鹿茸その他薬という薬はなんでも使ってみましたし、医者という医者も訪ねてみましたが、どうにもならなかったのです。ところが、近頃、先生の噂を聞いて遠くの地から訪ねて参りました。ですから、なんとかこの病気を治して下さるよう、是非ともお願いします」
「その病気に利く療法が一つあるにはありますが、実行することが容易でないと思われますので、勧めることがはばかれます」
「えっ、そうですか。でもご念慮には及びません。私のこの病気を治せるなら、財産を惜しみ、いかに苦い薬でも途中で投げ出すようなことは絶対に致しません」
「それほどの覚悟ができているのでしたら、処方をお教えしますから、きっとその通りにしてご覧なさい」
「ええ、必ずお教えの通りに致します」
「別に難しいことではありません。毎朝日の出とともに畑に出て、トウモロコシの根株を50株ほどずつ抜き取るのですが、それを15日間ばかし続けてご覧なさい」
「え？　トウモロコシの根株をですか」
「近頃はトウモロコシの取入れがすっかり済んでいましょうから、どの畑にも根株はあるはずです」
「ところで、その間どんな薬を煎じて飲めば……」
「薬は必要ありません」
「え？」
「言われた通り、15日間根株を抜き取ってからまたお出でなさい」
彼は訳が分からぬまま、わが家へ帰った。
名医を訪れて1服の薬も貰えずにがっかりして帰ったのだが、その処方なるものがどう考えても馬鹿げたことに思えてならなかった。けれども世に聞こえた名医の処方であり、1銭の金もかけないことだから、とにかくだまされたことにしてやってみようと思った。
ところが、思いがけないことが起きた。毎朝日の出とともに畑へ

出てトウモロコシの根株を抜き始めたが5日も経たずに、食べ物が胃にもたれず、重苦しい感じがなくなり、10日ほどすると、空腹を覚えて食欲がつき、15日目にはどんなにたくさん食べ物を食べてもなんともなかった。

「ふうむ、なんと神妙な処方だろうか」

彼は大喜びして、その翌日、下男に貴重な物品や食品を背負わせて李済馬の家を訪れた。

「神妙な処方」を教えてくれた医者に感謝の言葉を述べたかったし、とりわけトウモロコシの根株を抜くと胃病の治療にいかなる特効が生じるのか、是非とも知りたかったのである。

「先生、先生の処方はなんとも神妙です」

「で、どうでした？　効果はありましたか」

「もちろんです。10年の胃病が15日にして不思議にも全快したではありませんか。ところで、夜明けの日の出頃になると、トウモロコシの根株にいかなる妙薬が生じるのでしょうか」

「妙薬ですと？」

「でなかったら、朝トウモロコシの根株を抜くだけで胃病を治せるわけがありましょうか」

「ほほ、その訳はほかにあるのではありません。夜明け前から野良に出て働く農民には胃病がないではありませんか。彼らのように動き、働くなら治るだろうと考えて、その処方を適用したまでのことです」

金持ちは顔を赤らめ、それ以上なんとも言えなかった。

朝鮮史上の逸話

執　筆　朱成哲
編　集　李唯一
翻　訳　金時習
発　行　朝鮮民主主義人民共和国
　　　　外国文出版社
発行日　2026年4月

ㄱ-260880483483

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp



ISBN 978-9946-0-2815-6